

2024.8.26.

T.Kobayashi

新しい街 笑いが結ぶ 新しい出会い
豊洲の街の30年

8月17日、豊洲文化センターで開催した「全国社会人落語まつり」は、都笑亭(Twilight-tei・とわいらいとてい)と名付けた社会人落語の会の30周年を記念する特別企画イベントだった。

酷暑の夏、台風襲来の騒ぎの中で、お客さんがどのくらい来て下さるのか心配をしながら準備を重ねたが、台風は少しずつ進路を東に取り始めて、さしたる被害もなく通過してくれた。約130人のお客様が集って、無事しかも盛大に開くことが出来た。

追い出しの太鼓の音を聞きながら帰るお客様を見送っていたら、一人の男性、私と同じぐらいの年令で品のある風貌の男性が語りかけてきた。

いやー、面白かったですねえ。ありがとうございました。

今日は素晴らしいものを見ることができてよかった。

豊洲でこんな良いものが見られる、それが30年も前から続いていたなんて全く知らなかった。

実は私は、豊洲のIHIに勤めていました。何年か前に定年退職しましたが、

ここで落語会が定期的に行われていることなど全く知らずに毎日通っていました。

ひょんなことでこのイベントのことを知って見に来たんですが……。

こんな素晴らしいものがあったのを知らなかったなんて……。

これからも来られる限り毎回来たいと思います。

よろしく願います。

1994年の早春、と言ってもまだ夕暮時には寒さを感じるような頃、社会人落語の会を開くことが決まり、会場探しを目的に豊洲文化センターを訪れた。

豊洲界隈に勤める人と、豊洲界隈に住む人の往来の接点になる時間帯(夕暮時)に双方向の人の流れの交差点で落語会を開き、交流の場になったら……というイメージを頭に描いて豊洲文化センターに企画書を提出した。

豊洲文化センターの賛同を得られて、5月に開催することになり、広報宣伝活動に入った。

最初のターゲットは豊洲消防署。消防署があるビルの上階は消防署員の官舎らしかった。消防署の受付に立って、落語会の趣旨を説明して、官舎に住む皆さんへの広報もお願いしたところ、承諾してポスターを受け取っていただけました。

次は交差点を渡って路地裏に入ったところにある銭湯。落語にもしばしば登場する銭湯は人々の交流場所、ここを逃してはならぬと意気込んで、男湯の扉を開けた。

番台のおじさんは一見怖そうな顔つきではあるが、話を聞いてくれた。「男湯と女湯に一枚ずつポスターを貼らせていただきたい」と申し出たところ、「中へ入るのは困る、入口の男湯と女湯の扉の間の板壁なら貼っていい」。

そして会を重ねるにつれて郵便局・薬局・大衆食堂・居酒屋……と広がっていき、ポスター掲示やチラシのポスティングができる場所が増えた。中小企業の営業マンが新しい商品を開発して、何とか販路を広げたいとの思いで飛び込みセールスをして汗をかく、そんな景色を想像しながら歩き回った。

後日談になるが、豊洲再開発工事が始まるとすぐに、豊洲交差点の南側の取り壊しが始まった。工事

に先駆けて、銭湯やいくつかのお店が閉店になり、住んでいる人も徐々に減っていった。

銭湯が間もなく閉店になることを知ったある日、会社の帰りに立ち寄って入浴した。ここにポスターを貼ることで始まったことを振り返りながら湯船に浸かった。

街で一番大きい会社、というよりも街の顔であるIHIは、50m道路を挟んで海側には造船所などの現場があり、陸側には事務棟のようなものがあつた。入口は厳めしい門構えで守衛さんが立っていて、見知らぬ男が一人で入っていけるような構えにはなっていなかった。

終業時刻を見計らって門前に立ち、帰宅する社員の方に恐る恐るチラシを配ったこともあつたが、どこを訪ねていけばよいかわからない大きさの会社で、正面突破はできなかった。

これで退散では負け犬になってしまうので、次は帰宅の途につく方々が立ち寄る飲み屋を見つけてポスター掲示をお願いした。カウンターがある居酒屋で20人も入れば一杯になってしまうようなお店だったが、おでんや焼き鳥が美味しく、お酒も各種置いてあり、何よりも低価格なので驚いた。造船所で仕事を終えた方々が、「ちょいと一杯やって帰宅」という風情の店に、新参の情報産業の社員がYシャツ・ネクタイ・背広の姿で入ると、カウンターの客が一斉に視線を集中してくる。しかし、日を追うにつれてその空気は薄れて、情報産業の社員の数も増えてきて、同時に造船所から出てくるお客さんの数も再開発の進展に合わせるように徐々に減り始めてきた。そして、このお店も閉店になった。

この居酒屋から数百m離れた所に、一軒の小さなパン屋があつた。IHIの門前にあり、前述の居酒屋同様に、この街で働く人達を主要顧客とするお店だった。小さいお店ならではの入りやすい雰囲気、ガラス張りのショーケースに様々な調理パンも含めて陳列されていて、味もまずまずという感じだった。豊洲交差点を東雲側に少し進むと中華料理を中心とした大衆食堂があり、その先にお店はなかった。余談だが、この店の餃子は美味しいので、その後何度も何度も通つた。オーナー夫婦は気さくな方で店の中央部にポスターを貼らせていただいた。それどころか何度目かには、「ポスターはもう少し大きい方がいい」と助言して下さった上で、「レジの上に置いてくれれば、こっちで貼るから良いよ」とまで。その後、お店に出ない日には家族で(小学生の少年を連れて)何度も見に来ていただいた。

豊洲交差点を枝川側に進むと、日本で最初に開店したセブンイレブン一号店があつた。その角を曲がると集合住宅が並び、夜の闇は早かつた。

大通りの角を曲がる手前に、昼は大衆食堂で夜は居酒屋になるお店があつた。我が社の社員食堂よりもボリュームのある定食が気にいって昼飯を食べに何度も通つた。

ある日、ここで落語会の趣旨を説明してポスター掲示のお願いをした。「豊洲界隈に勤める人と、住む人の往来の接点になる時間帯(夕暮時)に双方向の人の流れの交差点として落語会を開き、交流の場になったら・・・」と趣旨を説明したところ、

「ならば、豊洲商友会会長のWさんを訪ねて行くといいよ」と、事務所のありかを教えて下さった。

そればかりか、この界隈で人が集るお店として何軒かをあげて、ポスター掲示場所として勧められた。

後日わかつたことだが、このお店のオーナーのIさんは商友会の要職に就いている方だった。

豊洲商友会の事務所は雑居ビルの中にあつた。商友会の会長であるWさんとお会いして趣旨説明の上でご協力をお願いをした。公式な話が終つたあとで茶飲み話になったら、Wさんがこんなことを語ってくれた。

私の家はIHIの門の前にあるパン屋です。

私の両親が始めたお店で、石川島の方々に食べていただこうと思って開業したお店です。

小さなお店だけでは食べていくのも大変なので、リヤカーで売り歩きもしていました。

豊洲地区の再開発が始まり、造船所がなくなり、高層ビルが建って大規模住宅や巨大な商業施設が沢山できることになっています。(もう工事は始まっている時期だった)

小さなパン屋も居酒屋も、路地裏の銭湯もなくなって新しい街に変わってしまいます。

そんな中で、両親が汗をかいて営んだパン屋を絶えさせてはいけない。

自分でこのあとを継いで、新しい街に残したいと思っているんです。

新しく生まれ変わる街での新しい交流の場としての落語会、是非進めて下さい。協力しますよ。

Wさんの熱いお言葉に後押しされて、翌週からまた「ポスター掲示場所」の開拓が進んだ。

「商友会のWさんのお許しを戴いて伺いました」の一言が力になり、ポスターの掲示場所が増えて、落語会の観客数も増え始めた。

豊洲交差点付近に新しい商業施設付の高層マンションが建ち並び始めた頃に、あるマンションの1Fに洒落たパン屋が開店した。お店の名前は「ペル・エ・メル」、Wさんが開いたお店だ。フランス語で「お父さんとお母さん」という意味だそうだ。その後交差点の周囲にイタリアンレストランやスペイン風の居酒屋などWさんのアイデアを懲らしたお店がいくつかできた。

都笑亭の日には、「ペル・エ・メル」でコーヒーを飲んで夕食用のパンを買うことが習慣になった。

Wさんは今でも時々落語会を覗きに來て下さる。

そして30周年の特別企画の日に、これまで手が届かなかった「IHIの人との接点」がようやくできた。

因縁と言おうか、奇遇と言おうか、嬉しくなるようなひとときを体感した。

様々な場面で様々な人と出会い、様々な体験を重ねて歩んできたという実感から、ある日こんなキャッチコピーを思いついてポスターの一隅に入れて、もう5年になる。

「新しい街 笑いが結ぶ 新しい出会い」

以上



<余談>

関東大震災の後処理として、瓦礫を埋め立てることのできた島が豊洲である。

「大震災から100年」と言われるが、この島も生まれてからまだ100年。

「豊洲の100年」の歴史の中での30年と考えると、街の歴史年表に参加できたような錯覚に陥り、独りよがりながら嬉しくなってくる。

●関連情報

都笑亭の紹介 www.i.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/sub2.html